

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：55503

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06815

研究課題名(和文) アリストテレスの問答法の理論とその発展的解釈の研究

研究課題名(英文) Development of Aristotelian Dialectic

研究代表者

高橋 祥吾 (TAKAHASHI, Shogo)

徳山工業高等専門学校・一般科目・准教授

研究者番号：10758337

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：アリストテレスの問答法の理論が、『トポス論』と『弁論術』における問答法の説明は異なっている。その説明の変化は、とりわけトポスの分類の方法に存在する。『弁論術』では多くの場合「共通」のトポスと「固有」のトポスに区別されると考えられていたが、本研究では、固有のトポスをアリストテレスは考えていないこと、そしてトポスの分類の差異は、元々『トポス論』の中にも存在していた「もっとも利便性の高いトポス」に影響を受けていることを示した。ただし、発展史的な解釈の可能性は限定的なものにとどまることが判明した。

研究成果の概要(英文)：Aristotle's dialectic is different between Topics and Rhetoric. The difference exist in the classification of Topos. In Rhetoric, many scholars thought that it is distinguished as "common" topos and "proper" topos, but this research confirm that Aristotle think the proper topos is not topos, but proposition. Further, the common topos in Rhetoric correspond with "the most opportune topos" in Topics. Rather "the most opportune topos" is a part of common topos. However, it is difficult to think that Aristotle had developed the theory of dialectic from Topica to Rhetoric.

研究分野：古代哲学史

キーワード：アリストテレス 問答法 ギリシア哲学 弁論術 トポス

### 1. 研究開始当初の背景

アリストテレスの問答法の理論は、つねに『トポス論』に依拠して論じられてきた。しかし、『トポス論』の問答法の理論は、アリストテレスの他の著作において、とりわけ問答法に基づいた議論をしていると解釈されている箇所において『トポス論』に基づいた問答法を用いた考察や論述をしていないように見える。このとき、アリストテレスは自分自身で考案した方法を用いていないという疑いが生じるだろう。しかしながら、そのようなことは考えがたいように思われる。

その一方で、『トポス論』で論じられている問答法の理論には、論理的な不整合が見いだされる箇所が存在し、複数の解釈が提示されてきた。もし、この不整合が解消できないものであるならば、アリストテレスはこの不整合を解消した別の形の問答法を考えた可能性はあるだろう。そして、問答法について間接的にはあるが論じている『弁論術』の内容を検討することは必要なことだと考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、アリストテレスは自らの問答法の理論に基づいた考察や論述をしているだろうという仮定のもとで、彼が『トポス論』で論じられている問答法とは別種の問答法を用いている可能性を検討し、そこに発展史的な解釈の可能性があるかを考察することを目的とする。すなわち、『トポス論』ではなく『弁論術』において論じられている問答法こそが、アリストテレスの考える問答法であると想定し、その『弁論術』の問答法は、『トポス論』の問答法から変化・発展を遂げたことを明らかにすることを目的とする。さらに問答法の応用事例の検討も行う。しかしながら、二つの著作間の問答法の差異は明らかにできるとしても、その差異を何からの発展として示すことは困難が伴う。そのため、具体的な目標として、(1)『トポス論』と『弁論術』のトポスを比較して、トポスの差異と特徴を考察し、(2)論証理論を援用して、論証理論と問答法の共通点を探り、論証理論の影響を受けたことを示し、問答法が発展していることを示すことを試みる。(3)その上で、他の著作の論述の中に、『弁論術』の問答法が用いられているのかを検討する。

### 3. 研究の方法

研究の方法は、アリストテレスの『弁論術』のテキストを詳細に検討し解釈することになる。上記の目的を達成するために、以下の手順を踏んだ。アリストテレスの問答法は、トポスと呼ばれる一種の推論規則に基づいて演繹推論を構築する方法である。したがって、(1)『トポス論』と『弁論術』のトポス

の比較を通じて、両著作のトポスの差異として、『弁論術』の「共通のトポス」と「固有のトポス」の特徴と、それに対応する『トポス論』のトポスを調査した。その次に、(2) 論証理論の検討を通じて、論証理論が『弁論術』の問答法のトポス論と関係を考察するため、ストイケイアとアルケーの用法を『分析論後書』、『トポス論』、『ソフィスト的論駁について』などの著作から調査検討し、トポスとの関係を探った。これら(1)と(2)の成果に基づいて、

(3) 『弁論術』における問答法の理論が、『トポス論』の問答法の理論と本質的な差異を持つかを検討し、問答法が『トポス論』から『弁論術』にかけて、変化し発展したことを明らかにしようとした。

### 4. 研究成果

『弁論術』におけるアリストテレスの弁論術と問答法の推論で用いられるトポスは、これまでの解釈では、「共通のトポス」と「固有のトポス」に区別されていると解釈されることがほとんどであった。実はアリストテレスは、「共通のトポス」と「固有のトポス」という表現を用いることはなく、「共通のもの」と「固有のもの」とだけ述べる。このとき、「共通のもの」については「トポス」だと明言している箇所が見いだせるが、「固有のもの」は「命題」と言われるのみである。それでも「固有のもの」がトポスと解釈されてきた理由のひとつとして、『トポス論』第三巻で論じられているトポスが、『弁論術』第一巻第七章で挙げられているトポスと共通していることが挙げられる。そして、「共通のもの」はトポスと言われているが、『弁論術』の主題は、あくまで弁論術の推論であるため、『トポス論』で論じられているほとんどのトポスと関係するとは思われていただろうが、その点についての研究は限られていた。

『トポス論』のトポスは、述語様式(定義項, 固有性, 類, 付帯性)を特定するために有効なものが集められており、そのためトポスは四つの述語様式ごとに分類されている。それに対して『弁論術』の共通のトポスは、多くの推論に適用できるという意味で「共通」であり、述語様式を特定するという目的に限定されていない。つまり、共通のトポスは、『トポス論』のトポスと違い目的が限定されておらず、その分様々な目的に利用可能なものでありうる。

『トポス論』のトポスの扱いは、基本的に特定の目的、すなわち定義探究に向けられているが、実は『弁論術』の共通のトポスとながるトポスについても論じられている。そのようなトポスをアリストテレスは、「もっとも利便性の高いトポス」と呼ぶ。『トポス論』のほとんどのトポスは定義探究のために四つの述語様式を特定することに特化したものである。あるひとつのトポスは、ひとつ

の述語様式を特定するために使うことができる。そのトポスは、別の述語様式を特定するためには使いがたい。なぜなら、そのトポスは、そのトポスが特定する述語様式の規定に基づいて形成されているからである。例えば、類を特定するためのトポスは、類の定義に基づいていて、このトポスを、固有性を特定するために用いることはできないのである。それに対して、「もっとも利便性の高いトポス」とは、ひとつの述語様式を特定するだけにとどまらず、四つの述語様式のいずれであっても、それらを特定する時に利用することができる。この特徴は、『弁論術』の共通のトポスと一致している。そして事実、『弁論術』では共通のトポスとして、「もっとも利便性の高いトポス」が取り入れられているのである。

その一方で、論証理論との関係という点では、論証のアルケー(原理)に「共通」と「固有」の区別が存在する点が、『弁論術』の共通のトポスと「固有のもの」と関連しているように見える。『弁論術』では、「固有のもの」をよりよく選択していくことで、最後には論証の原理に至ると述べられている。「固有のもの」は、論証におけるアルケーと、厳密さという点に違いがあるだけで、実体として同種のものである可能性が窺われる。この点に関連する箇所としては、『ソフィスト的論駁について』がある。この著作では、共通のトポスと固有のアルケーと一緒に論じられていて、何らかの論駁を行うとき、問答法家は共通のトポスに基づいた論駁を作り、専門知識を持つひとは、固有のアルケーに基づいた論駁をつくると考えられている。このことから、アリストテレスは、「固有のもの」の代わりに固有のアルケーを置き換えていることが推察される。

以上のように、論証の推論と問答法の繋がりは確認できるが、これだけでは論証理論が『弁論術』の推論の説明に影響を及ぼしていると断言できる要素だとは言いきれない。想定される著作年代としては、『トポス論』が初期の著作としてあり、『ソフィスト的論駁について』と『分析論後書』がその後成立し、最後に『弁論術』が成立していると考えられる。しかし、この著作順の想定とテキストから、理論の影響関係を因果的な関係として実証するまでには至らなかった。そのため、なんらかの問答法の「発展」を明示するには至っていないと言わざるを得ない。

その一方で、他の著作のトポスの实例には、『トポス論』の多くのトポスのうち、「もっとも利便性の高いトポス」、つまり『弁論術』における共通トポスの使用例が比較的多く見られるため、アリストテレスが共通トポスを中心に問答法を活用していた可能性が示唆される。そのため、アリストテレスは問答法を「発展」させたというよりは、活用の仕方を変えたと考えられることができるように思

われる。その「変化」について、より詳しい検討は必要であり、新たな課題として今後の研究に繋がりたいと考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

高橋 祥吾. 『弁論術』と『トポス論』のトポスの共通点と差異. 『比較論理学研究』 14. pp.7-20 2017年3月(査読なし)

高橋 祥吾. 『アリストテレスのディアレクティケーの理論の発展』. 『比較論理学研究』 13. pp.7-17 2016年3月(査読なし)

〔学会発表〕(計 4件)

高橋 祥吾. 『アリストテレス『弁論術』における一般化された問答法』. 2017年5月20日. 日本哲学会大会(一橋大学)

高橋 祥吾. 『弁論術』のトポスと『分析論後書』のアルケー. 第166回 PHILETH セミナー「アリストテレスとその周辺」(第6回 PAP 研). 2016年9月13日. 北海道大学.

高橋 祥吾. 『アリストテレスの推論におけるトポス, アルケー, ストイケイア』. 第八十四回西洋哲学研究会 2016年7月23日. 広島大学東千田キャンパス.

高橋 祥吾. 『アリストテレス『弁論術』における共通トポスと固有トポスの問題』. 第八十三回広島大学西洋哲学研究会 2015年7月25日. 広島大学東千田キャンパス.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

高橋 祥吾 (TAKAHASHI, Shogo)

徳山工業高等専門学校・一般科目・准教授

研究者番号：10758337

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )